【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（小学校用）

都道府県名	鹿児島県

Ⅰ．学校の概要（平成１５年度４月現在）

学校名	伊仙町立伊仙小学校								
学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数
学級数	1	1	1	1	2	1	1	8	
児童数	２７	２７	２２	２６	４１	２７	1	１７１	１２

Ⅱ．研究の概要

１．研究主題

子ども自ら，「学び」を育てる子どもの育成

２．研究内容と方法

（１）実施学年・教科

・全学年国語
子どもの表現力，語彙力，読解力が不十分であるため。
・全学年算数
子どもの理解度に差がみられると共に，基礎的・基本的内容の定着が不十分であるため。

（２）年次ごとの計画

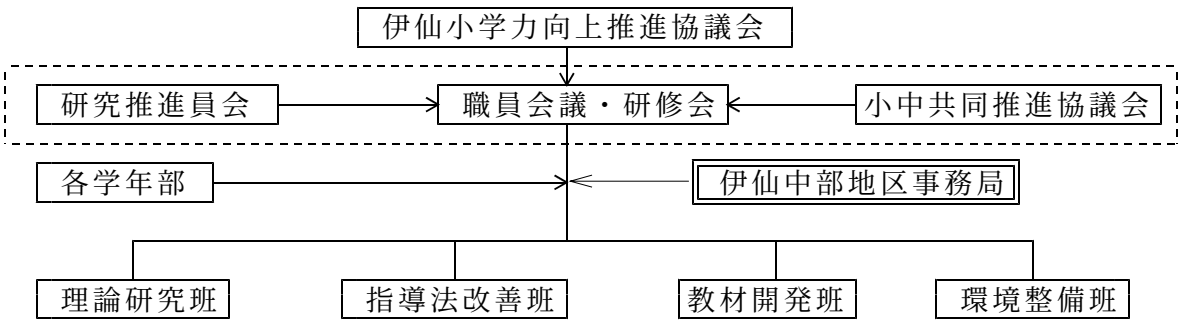
平成14年度	○テーマ 子ども自ら，「学び」を育てる子どもの育成 ー基礎学力の向上の基本的な考え方ー ○研究の見通し（仮説） ・仮説１：　子どもの理解度に応じた場を学習過程に位置付けるならば基礎的・基本的内容の定着を図れるのではないか。 ・仮説２：　基礎学力を支える要素を分析し，子ども同士が自分の見方・考え方を自由に出し合えるような場を設定するならば，互いの磨き合いが活性化されるのではないか。 ・仮説３：　保護者への家庭学習の大切さや子どもの家庭学習の習慣化を促すような場を設定するならば，家庭学習が充実されるのではないか。 ○研究の内容・方法 １　研究内容 （１）仮説１について ・　子どもの算数科における単元別の定着度の分析（算数科） ・　習熟度別コースの基本的な考え方の作成 （２）仮説２について ・　個に応じるための指導法の改善（算数科） ・　計算力を高めるための日課表の見直し ・「チャレンジタイム」の見直し （３）仮説３について ・　保護者の教育への関心度を高めるための場のあり方 ２　研究方法 （１）仮説１，２について ・　全児童の各単元別の実態調査，観点別の分析 ・　単元毎における習熟度別の指導計画の実施及び見直し （３）仮説３について ・　外部講師の講演による家庭学習の重要性の啓発

平成15年度	○テーマ 子ども自ら，「学び」を育てる子どもの育成 ー個が生きるための指導法の改善（国語科・算数科）ー ○研究の見通し（仮説） ・仮説１：　子どもが自分で学習を進められるような学習環境を整えたり，教材を開発したりするならば，子ども自身が学習状況の把握に役立つのではないか。 ・仮説２：　教科担任制を導入するならば，教師の特性が生かされ，系統的，多面的な指導がなされ基礎的・基本的内容がより定着するのではないか。 ○研究内容・方法 １　研究内容 （１）仮説１，２について ・　子どもの全単元別の定着度の分析（国語科・算数科） ・　個に応じるための指導法の改善（国語科） （２）仮説１について ・　個の習熟度に応じた教材の開発 ・　日課表における「読書の時間」の導入 （３）仮説２について ・　教科担任制の導入学年の検討 ２　研究方法 （１）仮説１，２について ・　子どもの各単元別の実態調査（国語科・算数科），観点別の分析 ・　学習環境の見直し （２）仮説２について ・　教科担任制が可能な時間割の作成

平成16年度	○テーマ 子ども自ら，「学び」を育てる子どもの育成 ー子ども自ら，「学び」を育てるための教育課程の編成ー ○研究の見通し（仮説） ・仮説１：子ども自身が確実に評価できるような評価を学習過程の中に位置付けるならば，自己を見つめる力が身に付くのではないか。 ・仮説２：小学校・中学校の連携を図った教育課程を編成するならば，９か年での学びを育成できるのではないか。 ○研究内容・方法 １　研究内容 （１）仮説１について ・　子どもの全単元別の定着度の分析（国語科・算数科） ・　国語科，算数科における評価規準の作成 ・　自己評価のあり方と学習課程への位置付け方 （２）仮説２について ・　９か年を見通した国語科，算数科の指導計画の作成 ２　研究方法 （１）仮説１について

	・　全児童の各単元別の実態調査（国語科・算数科） ・　評価規準作成の資料収集及び検討 ・　単元毎における習熟度別の指導計画の作成及び見直し （２）仮説２について ・　中学校との合同研修会の実施

（３）研究推進体制



○伊仙中部地区事務局

伊仙地区を中学校区別に３つに分け，その伊仙中学校地区を中部地区とした。そのメンバーとして伊仙小２名，他の学校から１名を選出し，各学校への波及，研究内容の調整，推進を行った。

Ⅲ．平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１　研究の成果

・　習熟度別コースに分かれることで，自分はどこまで理解でき，どこが分からないのかを，児童が真剣に考え，認識することができた。
・　解決方法別コーナーを設置し，子ども同士意見を磨き合わせることで，協力し合い，助け合って問題を解決しようとする態度が見られるようになった。
・　より少人数での自力解決や共同解決の場をできるだけ確保することによって，自分なりの考えやその根拠を絵や図，式などによって表現し，説明しようとする子どもが増えてきた。
・　読書の時間を確保することで，読書への関心が高まりつつある。
・　家庭への啓発をしたことで，家庭で読書をする機会が増えてきた子どもも多い。
・　読書の時間が増え，子どもたちに表現力がつきつつある。
・　自分のペースで学習を進められるので，意欲的に学習に取り組めていた。
・　チャレンジタイムの定着が図られた。
・　教科担任制により，系統的な教材の研究が可能になったため，よりよい授業の構築ができるようになった。
・　教科担任制や複数の教師による指導が可能になったため，どの教師にも質問したり，みんなで子どもたちを見守っていく雰囲気ができつつある。
・　保護者の教育への関心度も高まり，ＰＴＡ研修部内で学力向上についての話し合いが活発になり，親子の読み聞かせや生活習慣の見直しがなされた。

２　今後の課題

・　各学年ともに習熟度別コースにおける少人数指導を実施してきたが，さらに個に応じた指導を徹底するために，個の学習状況に合った教材の開発が必要である。 ・　習熟度別における少人数指導を実施することで，子どもたちの学びの姿勢や個に応じた指導の充実はなされてきたが，各学年の評価や各コース別の評価の研究を進めていく必要がある。 ・　教科担任制による指導で，系統的な教材開発や教材研究はなされてきたが，学級担任との連携や打ち合わせの時間の確保など再考する必要がある。

Ⅳ．学力等把握のための学校としての取組

定期的な学力検査の実施（年１回） 各単元毎の個人データ収集と分析（各学期）

Ⅴ．フロンティアスクールとしての成果の普及

○これまでの研究会，説明会の実績

平成１５年　５月　８日（木）地区学力向上推進協議会
平成１５年　６月　２日（月）中部地区小中連携部会，授業研究会（伊仙中学校）
平成１５年　６月２０日（金）中部地区研究テーマ共通理解，
　　中部地区授業研究会（伊仙小学校第６学年）
平成１５年　７月２５日（金）地区学力向上推進協議会教員部会
平成１５年　９月２２日（月）中部地区小中連携部会（鹿浦小学校５，６年複式）
平成１５年１０月２８日（火）中部地区小中連携部会（馬根小学校３，４年複式）
平成１５年１０月２９日（水）伊仙小校内研修会（第４学年）
　　鹿浦小との交流学習（習熟度別）
平成１５年１１月１０日（月）伊仙小校内研修会（第２，５学年）
平成１６年　１月２９日（木）学力向上フロンティアスクール中間発表会

◇　次の項目ごとに，該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　□１５年度からの新規校　■１４年度からの継続校

【学校規模】　□６学級以下　■７～１２学級
□１３～１８学級　□１９～２４学級
□２５学級以上

【指導体制】　■少人数指導　■Ｔ．Ｔによる指導
■一部教科担任制　□その他

【研究教科】　■国語　□社会　■算数　□理科
□生活　□音楽　□図画工作　□家庭
□体育　□その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　■有　□無